

組織への関わりに関する選好行動 (自発的一人を好む人の意識調査)

1180445 武田万由子

高知工科大学 マネジメント学部

第1章 研究の目的と背景

本研究の目的は「自発的一人を好む人はどのような意識構造を有しているのかを明らかにするとともに、これらの人を含めた組織の在り方を検討すること」にある。

現代社会では、生涯独身者が増加傾向にある(内閣府男女参画共同局 2013 図1 参照; 国立社会保障・人口問題研究所 2010; 出会う恋活・婚活サイト 2015; NAVER まとめ公式ブログ 2017)。

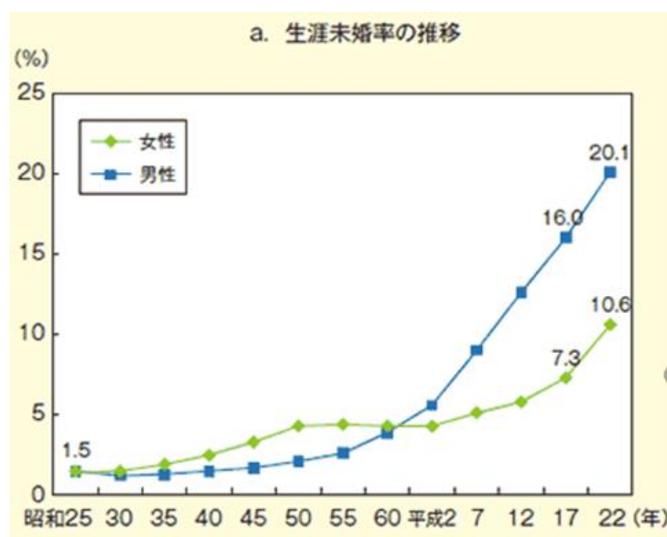


図1 生涯未婚率の推移

また、会社や学校でのコミュニケーション不足、あるいはいじめなど人と人との繋がりに関する問題も生じている(高橋・河合・永田・渡部 2008)。その問題の原因の1つとして「社会の中でひとりになっている人、すなわち孤立する人が存在し、上手く輪に入り込めないという状況」があるのではないだろうか。これが、本研究における根本的な問題意識である。

ひとりで過ごすという志向には、大きく2つの種類があるといわれている(海野・三浦, 2007)。1つは、ひとりで過ごしたくないのに、何らかの外的要因によりひとりで過ごすしかない、すなわち「受動的なひとり」である。いま1つは自分の意志であえてひとりで過ごす、すなわち「能動的なひとり」である(海野・三浦, 2007)。

ここで、受動的なひとりとは「非自発的のひとり」、また能動的なひとりとは、「自発的のひとり」と定義することができる。非自発的のひとりに関連する問題として例えば「いじめ」が挙げられる。この場合、当事者は仲間と過ごしたいと思っているのに、周りから排除される形で孤立する。いじめは現在社会問題化しており、その対策や方法が社会全体で模索されている(全国 web カウンセリング協議会 2005-2010)(心屋 2009)。

一方、自発的のひとりの場合、ひとりになっている本人自体も現状から脱することを望んでいないため、問題視されることが少ない。さらに、ひとりで過ごす時の感情を研究した結果を見ると、受動的なひとり(非自発的のひとり)ではネガティブな感情が85%を占めているのに対し、能動的なひとり(自発的のひとり)はポジティブな感情が過半数を占め、残りが複雑な気分を含む状況であることが示唆されている(海野・三浦, 2007)。このように「自発的のひとり」は複雑な感情を抱きつつも、自分自身が問題視しておらず、改善を必要としていない状況にあることが明らかとなっている。

しかし、これらの人も社会の一員として、また組織の一員として人と人との繋がりの中で生きている。学校では学年、クラス、班等の中での繋がりがあり、また会社では～署、～部、～科での組織行動がある。そういった環境で自発的に一人を好む人がひとりで行動を取ろうとすると組織全体の連携が取れなくなるなどの問題が生じる。

また、組織ではひとりの問題行動が連帯責任になることも考えられる。先行研究でも、実際に即席でつくられた単なるグループでの活動よりも部活や部署のようにチームとして活動する方が良い成果が上げられることが示されている(大島 2010)。

以上から、自発的に一人を好む人であっても、組織の中で上手く人間関係を築き、協力し合っていくことは社会的見地から望ましいと言える。したがって、社会あるいは組織は自発的に一人を好む人とのように関わっていくか、これらの人を含めた組織の在り方を検討する必要がある。

第2章 関連先行研究のレビューと研究課題の導出

1. 先行研究

第1章で述べたとおり、人と人との繋がりに関係する問題が生じている原因の一つとして、「ひとり」になっている人が社会の中で上手く輪に入り込めないことが挙げられる。以下では、このような観点から「ひとり」に焦点をあてる先行研究を整理する。

海野・三浦(2007)では、ひとりになりたくてなっている人(自発的一人)とひとりになりたくないのになっただけの人(非自発的独り)が抱えている感情や理由について検討している。これによれば能動的なひとり(自発的一人)になる状況について、「よくある」と回答した人の割合が一番多く(32.2%)、「よくある」「ときどきある」「たまにある」と回答した人の割合は82.7%であった。この結果は、ほとんどの人が自分の意志でひとりで過ごすことがあることを示唆している。これに対して、受動的なひとり(非自発的独り)については、「たまにある」と回答した人の割合が一番多く(33.1%)、「まったくない」と回答した人が23.8%に上った。

さらに、能動的なひとりと受動的なひとりになる状況での感情を分析した結果によれば、能動的なひとりの状況では、落ち着く・リラックス・安心・楽などの「ポジティブな気分が過半数を占める(56.0%)。次いで、疲労感・倦怠感・孤独感などの「ネガティブな気分(19.5%)」、特に何も感じない「ニュートラルな気分(10.2%)」、少しさみしいけど落ち着く・少しさみしいけど気楽など「アンビバレントな気分を併せ持つ(2.7%)」の順となっている。

一方受動的なひとりとは、さみしい・孤独・抑うつ・不安などの「ネガティブな気分」の回答が全体の大部分を占めており(84.9%)、「ニュートラルな気分(2.1%)」、「その他(13.0%)」の順となっている。

特に、気分について比較して考えてみると、「受動的なひとり」の場合には、ネガティブな気分の記述が約85%と大部分を占めていたのに対して、「能動的なひとり」の場合には、ポジティブな気分が過半数に上るものの、ネガティブな気分、アンビバレントな気分、ニュートラルな気分など様々な記述が見られた。すなわちこれらの人は、「受動的なひとり」のように一筋縄ではいかず、複雑な気分を含む状況であることを示唆している。これについて、海野・三浦(2007)は、「能動的にひとりで過ごす」ということがそれ自体、自立と依存、自由と孤独というような青年期に特有の葛藤を含んでいるために、複雑な気分の記述が見られたのではないかと分析

している。また、「能動的にひとり」で過ごす理由として、人と話したくない・人と接するのが面倒だからひとりで過ごすといった理由の記述も存在した。一方で、自分のしたいことができる、落ち着く・リラックス、楽・気楽などの気分を感じられる、そういう時間を好き・必要・大事と感じている、自分にとってプラスとなると捉えている等、能動的にひとりで過ごすことを肯定的に捉えている記述が多く見られた。

2. 研究課題

先行研究でも述べられているように、ひとりには大きく2つの種類が存在している。しかし、実際には、そういったひとりの中でも常にひとりきりなわけではなく、周りの環境や集団の種類によっては孤立せず、協力し合えることがあると考えられる。そこで、その人に合った集団の種類(雰囲気、人数、男女比、場所)を見つけ出すことができれば、少なくともその中では十分に協力し合えるのではないかと考えることができる。

そこで、本研究では、大学生を対象に、ひとりで過ごす時間を好む人の性格の特徴・経験がどのように関連しているのかを検証し、さらに、ひとりでいることを好む人が居心地が良い集団にするにはどのような対策が必要なのかについて検討する。

仮説を導出するにあたり、本研究では第1に以下のアンケート結果により「自発的ひとり(自発的一人を志向する人)」を識別する。

(1)「ひとりへのマイナスイメージ」、「ひとりでいる時間への好意」、「集団への嫌悪感」の全てにおいて基準値を満たした人(自発的一人a)。

(2)理想のひとりで行動する時間が平均以上の人、あるいは、集団で過ごす理想の時間が平均以下の人(自発的一人b)。

また仮説としては以下の5つを提示する。

- ①自発的一人を好む人は、自身を謙遜し他者との交流を拒むので「自己否定度」が高い。
- ②自発的一人を好む人は「コミュニケーション能力」が低い。
- ③自発的一人を好む人は「集団への嫌悪感」が高い。
- ④自発的一人を好む人は、「周囲の状況(場の空気)」を気にする。
- ⑤自発的に一人を好む人は集団でいる時間が少なく、ひとりでいる時間が長い。

また自身を面白い人ではないと考えている ($t=4.19, p<0.01$)。

仮説②の検証 自発的一人を好む人と「コミュニケーション能力」との関連

自発的一人を好む人は、そうでない人と比較して、コミュニケーション能力が低いと自身で評価しており、自ら積極的にコミュニケーションを取ろうとしない。具体的には、自身を饒舌ではなく ($t=3.68, p<0.01$)、会話が楽しいと感じない傾向 ($t=2.94, p<0.01$) にあり、人付き合いが得意ではない ($t=-1.92, p=0.06$) と感じている。

仮説③の検証 自発的一人を好む人と「集団への嫌悪感」との関連

自発的に一人を好む人は、そうでない人と比較して、集団への嫌悪感が強い。具体的には、周りに人がいると鬱陶しく感じる事が多く ($t=-2.89, p<0.01$)、集団で居ることにストレスを感じ ($t=-1.91, p=0.06$)、集団で居る時もひとりで行動することがあるという傾向にある ($t=-2.64, p<0.01$) とともに、自身は集団に向いていないと考えている ($t=3.10, p<0.01$)。

仮説④の検証 自発的一人を好む人と「周囲の状況」との関連

自発的に一人を好む人は、そうでない人と比較して、周囲の状況への関心が高い。具体的には、他者の状況が気になり ($t=1.93, p=0.06$)、大勢の人がいる状況で会話に入ることが出来ない ($t=-2.71, p<0.01$) 傾向にある。

仮説⑤の検証 自発的に一人を好む人と「集団・ひとり時間」との関連

自発的一人を好む人はそうでない人と比較して、団体として活動・行動することに複雑な感情を抱いている。そのため、集団でいる時間が少ない方が良いと感じており ($t=3.809, p<0.01$)、ひとりで過ごす時間がさらに多くほしいと考えている ($t=-5.12, p<0.01$)。

第5章 仮説の検証結果

仮説① 実証結果から仮説①は支持された。すなわち自発的一人を好む人は「自己否定度」が高く、自身に自信がない傾向にある。

仮説② 実証結果から仮説②は支持された。すなわち自発的一人を好む人は自らコミュニケーションを取ろうとせず、人付き合いが苦手な傾向がある。

仮説③ 実証結果から仮説③は支持された。自発的に一人を好む人

は、そうでない人と比較して、集団への嫌悪感が強い傾向にある。

仮説④ 実証結果から仮説④は支持された。すなわち、自発的一人を好む人は「周囲の状況」への関心が高い。

仮説⑤ 実証結果から仮説⑤は支持された。自発的に一人を好む人は、集団でいる時間は少なく、ひとりで居る時間を多くしたいと考えている傾向にある。

第6章 まとめ

本研究では、集団へ参加することに対するネガティブな感情(嫌悪感)を有する者、また日常的にひとりで過ごす時間が相対的に長時間である者を自発的一人を志向する者と定義した。これに基づき、自発的一人を志向する者で構成されるグループとコントロール・グループを比較検証した。

その結果、自発的一人を好む人は「自己否定度」が高く、人との交流を拒んでしまうため、自らコミュニケーションを取ろうとしないことが示唆された。

また、これらの者は「集団への嫌悪感」を抱いており、他者の状況を気にしすぎてしまうあまり、上手く会話に入っていけない状況にある。これらのことから、集団で過ごす時間が少ない方が良いと感じていることが明らかとなった。

その他として、本研究では、自発的に一人を好む人は、この志向性に影響する過去の「経験」を有すると仮定していたが、自発的一人を好む人といじめ・人間関係のトラウマの経験との関係は示されなかった。

また、自発的一人を好む人はひとりで居ることに対してポジティブなイメージのみを抱いているわけではなく、寂しい ($t=-1.92, p=0.06$) という感情も抱いている。この結果は、先行研究の結果を支持するものである。

他に、興味深い点として、自発的一人を好む人は、家族構成に妹が存在する可能性が高いことが示された ($t=-1.847, p=0.07$)。これは、自身より後に生まれた者(妹)のほうに親からの愛情を受け易く、したがって自身は幼少期から親子関係を俯瞰的に捉えているという状況が存在していたのではないだろうか。すなわち家族の中で、妹に遠慮するかたちで一人の世界を構築するといったプロセスが存在していると思われる。

第7章 今後の課題

本研究の結果を受け、社会全体でとりくむべき問題として認識す

べきものは、例えば孤独が招く病気として鬱病・不安障害・生活習慣病等が挙げられる（孤独はデメリットだらけ！「人生を損しない生き方のススメ」2017）。会話をすること、誰かと一緒にいることで解消されるストレスも、ひとりで殻に閉じこもっている時間が長いと解消できない。これにより、鬱病や不安障害を発症してしまうケースがある。また、生活スタイルや体質にもよるが、人との付き合いが全くないということは、外出の機会や体を動かす機会も奪うことになる。

しかし、これらの人を無理にコミュニケーションの輪に引き込もうとすると、その際の苦痛によって、自発的にひとりを好む気持ちがさらに強くなる可能性もある。ここで、例えば、自発的に一人を望まない、コミュニケーションが得意な人が、集団と対象者の間に「伝達係」のような役割を果たすことが重要であろう。そして、自発的に一人を好む人が徐々にコミュニケーションの輪になじんでいけるように誘導することで急激な苦痛を与えることなく集団の輪に入ることができるのではないだろうか。

いずれにしても、少子化（一人っ子の増加）、高度な情報化による対面コミュニケーションの減少など、現代は自発的な一人を志向する人の増加を招く環境が多くある。したがってこれらの人が生きやすい社会の仕組みを形成することは重要な課題である。

第8章 参考文献

[1]海野裕子・三浦香苗（2006）”ひとりで過ごすことに関する大学生の意識” — 「能動的なひとり」と「受動的なひとり」の比較— 昭和女子大学生生活心理学研究所紀要

[2]エガオサクラのお悩み解決サイト☆★(2017) “孤独はデメリットだらけ！「人生を損しない生き方」のススメ” <https://egao-saku.net/smile/get-well/3050/>（最終閲覧日2月13日）

[3]蛭子能収（2014）”ひとりぼっちを笑うな” 角川新書

[4]大島洋（2010）”管理者の心得” リーダーシップを立体的に捉える ダイアモンド社

[5]国立社会保障・人口問題研究所（2010）”第14回出生動向基本調査”

http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou14_s/chapter1.html
（最終閲覧日4月1日）

[6]心屋仁之助（2014）”人間関係が「しんどい！」と思ったら読む本” 中経の文庫

[7]全国webカウンセリング協議会（2005-2010）”いじめ対策マニュアル”
<http://www.web-mind.jp/>
（最終閲覧日2月12日）

[8]出会える恋活&婚活サイト（2015）”一生独身の人が増えている6つの理由【生涯未婚】”
<http://deaidukuri.com/issyoudukusim>（最終閲覧日4月1日）

[9]高橋・河合・永田・渡部（2008）”不機嫌な職場” 講談社現代新書

[10]内閣府男女共同参画局（2013）”男女共同参画白書 平成25年度版”
<http://www.gender.go.jp/about/danjo/whitepaper/h25/zentai/html/zuhyo/zuhyo01-00-20.html>（最終閲覧日4月1日）

[11]堀井俊章・小川捷之（1996）”対人恐怖心尺度の作成” 上智大学心理学年報

[12]NEBER まとめ（2017）”50歳未婚過去最高に35歳結婚限界説及び一生独身が現実味”
<https://matome.naver.jp/odai/2133889765626341001>（最終閲覧日4月1日）